

下村観山の英国留学と「日本画」形成

加藤弘子（都留文科大学）

本発表は下村観山（1873 - 1930）の英国留学に関する調査結果を共有し、「日本画」は日本で日本人のみによって作られたわけではないことを再確認する。

明治 35 年（1902）5 月、東京美術学校は文部大臣宛の年報に、教員に西洋美術の趨勢を観察させ、我が国の美術の改善発達を計ることが急務と述べ、観山は 2 年間の英国留学を命じられた。「留学始末書」（神奈川県立歴史博物館所蔵）によれば、観山は明治 36 年（1903）6 月から記者で日本美術蒐集・研究者のアーサー・モリソン（1863 - 1945）の指導により、大英博物館、ナショナルギャラリー、テートギャラリー一他の絵画館で主に古画を模写した。

留学前の観山は「日本画」の基礎を雪舟など「足利時代の絵画」とする一方、好きな西洋画を問われて「皆佳（よ）く見えます」と答えたほど、西洋画に強い関心があった。師の橋本雅邦へ宛てた書簡（個人蔵）には名画を実際に見た喜びが綴られ、洋服で西洋画を鑑賞し、和服で研究制作に励む姿が描かれる。

観山が第 15 回日本絵画協会・第 10 回日本美術院連合絵画共進会展に送った《聖母》は、ロンドンにあったラファエッロ《椅子の聖母（模写）》を写したとされるが、キリストとヨハネの表情は原作と異なり、「色はまるで単調」と評された。この模写は審査対象外とされ、反対に「衣服の着色が少し派手」と評された古代ギリシアの哲学者を描いた《ダイオゼニス》は銀牌二等を獲得した。帰国前に観山は水墨主体で同主題の絵画を描き、大英博物館のローレンス・ビニヨンが著書の中で、高く評価している。

モリソンは観山の留学を支援し、明治 37 年（1904）4 月には観山の個展実現のため友人のミーズ氏に面談を依頼した。これまでミーズ氏が誰か不明であったが、英国の在野美術団体である英国王立芸術家協会（RBA）展の画家ジョン・アーサー・ミーズ・ローマス（John Arthur Mease Lomas 1862-1950）と発表者は考えた。

日本の伝統絵画の絶滅が危惧される中、ビニヨンは日本絵画コレクションの充実をはかり、モリソンのコレクションは大英博物館に収蔵された。また、モリソンは *The Painters of Japan* (1911) において、やまと絵の継承者として観山に土佐派芸術の復興を期待し、さらに、英国王立芸術家協会（RBA）で開催された日本屏風絵展の図録に解説を寄稿している。当時の英国における日本の伝統絵画蒐集・研究と「日本画」形成は表裏一体の関係にあり、留学は観山に西洋画研究だけでなく、日本の伝統絵画への回帰を促したのである。

留学で一旦、西洋画を習得して初めて、日本画と西洋画の双方を研究した結果が画の上に現れると見込んでいた観山であったが、帰国後は心身の病に苦しむ。結果として、日本美術院の五浦移転があったおかげで、観山は英国留学の成果を発揮することができた。